

オリンピック雑感

国際文化学科長 川口喜治

少しく旧聞に属するが、北京オリンピックが開催された。開催前にいろいろと物議を醸したが、大会自体はとりわけ大きな事件もなく無事終了した。大がかりで人工の妙を尽くした開会式に代表されるように、まさに国家の威信をかけた極色彩のド派手な大会であった。

さて大学の頃、私は、今の姿からは想像できなだろうが、陸上競技をかじっていて、いきおいスポーツの興味もそちらに向いていた。当時、日本の陸上界で世界に通用したのは男子の長距離、それもマラソンだけであった。そのトップ選手は瀬古俊彦。増田明美が彗星のごとく現われ女瀬古と呼ばれて女子長距離界の先駆者となっていくのもちょうどその頃である。不世出のランナーといってもよい瀬古にはある期待がかけられていた（と思う）。戦後日本陸上界悲願の金メダル。しかしそれは叶わなかった、いや、叶う土俵にもあがれなかった。モスクワオリンピック、それは多くの西側諸国のボイコットによってオリンピック史に記される不幸な大会である。世界最高記録保持者・米のアルバルト・サラザール、スタミナの塊・豪のロバート・ド・キャステラ、そして精密機械・瀬古が、巧妙な駆け引きを繰り返し、勝負はモスクワのメインスタジアムまでもつれ込む、その興奮を期待した陸上ファンも多かったのではないか。彼らの戦いは四年後、東側諸国がボイコットした酷暑のロサンゼルスまで持ち越されるが、三選手ともすでにピークは過ぎており惨敗であった。このロス大会は、オリンピックが市場主義経済・商業主義という禁断の果実を口にしてしまった大会であり、以後の大会は、大規模で格好良いお祭り騒ぎになってゆく。アマチュアの泥臭さ、ひたむきさを体現していた風な瀬古、サラザール、キャステラがロス大会で敗れたことは、ある意味象徴的なできごとではなかったろうか。そしてイデオロギーや政治的対立をも塗りつぶす極色彩の大会には、当然ボイコットなどありえないのだろうか、ふと思ったりもしたのである。

